

## 組織ディスコース研究部会と日本の物語論について

組織ディスコース研究部会

増田 靖（ますだ やすし）光産業創成大学院大学

主査 高橋正泰（たかはし まさやす）明治大学

幹事 四本雅人（よつもと まさと）長崎県立大学

### 1. はじめに

ヨーロッパを中心に、近年ではアメリカでも「ディスコース」への関心が社会科学において高まりつつある。ディスコース分析においては、実体概念から関係概念へと捉え直すことによって、人々がどのように意味世界を構成するのか、そして、社会的行為がどのように生成されるのかを明らかにすることが可能になる。組織ディスコース研究部会では、こうした方法論・分析手法をもって、昨今の多様化する組織現象、および情報の調査分析を進展させることで経営学のさらなる発展に資したいと考え、言語派組織情報研究部会を前身とし、2011年に発足した。

### 2. 研究部会の活動内容（高橋正泰・四本雅人）

研究部会の具体的な活動としては、年3～4回の研究会（研究発表会）の開催と、経営情報学会全国発表大会での研究部会セッションや個別のワークショップ、シンポジウムの開催を行っている。

特に、ワークショップにおいては、海外から組織ディスコースやCMS（Critical Management Studies：批判的経営研究）、新制度派組織論、組織文化論等の著名な研究者を数多く招聘してきた；（以下、敬称略）組織ディスコース研究の第一人者 David Grant（グリフィス大学）、CMSの創始者 Hugh Willmott（カーディフ大学）、Rick Delbridge（カーディフ大学）、*The Oxford Hand-Book of Critical Management Studies*（2009）や *Organizational Culture*（SAGE Library in Business and Management）（2015）を編集した Mats Alvesson（ルンド大学）、新制度派組織論の第一人者 Roy Suddaby（ヴィクトリア大学）、AOM（Academy of Management）元会長の Paul Adler（南カリフォルニア大学）他。

また、本研究部会のメンバーは、国際学会での研究発表を積極的に行っており、これまでに、AOM（Academy of Management）、EGOS（European Group for Organizational Studies）、ICMS（International Critical Management Studies）、SCOS（Standing Conference on Organizational Symbolism）等に参加してきた。

その他には、本研究部会のメンバーにより、David Grantら（2004）の編集による *The SAGE Handbook of Organizational Discourse* を翻訳し、『ハンドブック 組織ディスコース研究』として、2012年に同文館出版より出版。2019年には『組織のディスコースとコミュニケーション：組織と経営の新しいアジェンダを求めて』（清宮徹）を同文館出版から、そして、「経営組織論シリーズ」『マクロ組織論』（監修：高橋正泰，編著：高木俊雄・四本雅人）、『ミクロ組織論』（監修：高橋正泰，編著：竹内倫和・福原康司）、2020年には同シリーズ『組織のメソドロロジー』（監修・編著：高橋正泰，編著：大月博司・清宮徹）を学文社から出版した。

以上が、組織ディスコース研究部会のこれまでの活動内容の概略である。

この後は、本研究部会の名称になっているディスコース研究について、前回の2018年の研究部会活動報告で掲載した「物語論の系譜」（増田靖）の続編である「日本の物語論」を紹介する。

### 3. 日本の物語論（増田 靖）

研究部会の前回の活動報告で、経営情報分野の組織ディスコース研究における重要な理論的資源としての「物語論」を系譜学的に辿って概要を紹介した。今回は、日本の物語論を紹介する。しかし、筆者は日本文学研究者であるわけではなく、また与え

られた紙幅から、その全容を論じることは、役不足でもあり不可能である。ここでは、経営情報学と組織ディスコース研究に資すると考えられる研究を中心に紹介する。なお本稿は、増田（2013）の論述を基底に論じる。

前回論じたように、物語論の起源は、古代ギリシアのアリストテレスの『詩学』まで辿ることができる。しかし、ヨーロッパで物語が文学として成熟するのは、14世紀のボッカチオの『デカメロン』まで待たなければならなかった。一方日本では、物語は10世紀から11世紀にかけての平安時代に一大隆盛期を迎える。世界最古の長編小説といわれる『源氏物語』が代表である。そして、この『源氏物語』が日本の物語論の嚆矢といわれている。

紫式部（1965a）は『源氏物語』の中で、『竹取の翁』（竹取物語）のことを「物語の出で来はじめの親」（p. 183）と呼んだ。竹取物語には「竹取の翁」をはじめ、それまでの昔話のおじいさんとおばあさんとは異なり、それぞれ名を持つ人物が描かれている。紫式部はこのように物語を規定するだけでなく、同じく『源氏物語』の蛸巻で光源氏に、「日本紀などは、ただ、片そばぞかし。こちら（物語）にこそ、（世の中の）みちみちしく、くはしき事はあらめ（歴史書（当時の権威ある学術書）よりも物語の方が現実社会の真実を伝えている）」（紫式部、1965b：p. 49、括弧内は筆者）と論じさせているのである。

当時物語だけでなく、日記も日々量産されていたが、その担い手は、宮廷の女房たちである。それでは、その物語や日記はどのように使われていたのだろうか。折口（1996）によると、当時の女房たちは、自分たちで物語を作り、それを皇族の子女に語り聞かして教育していた。つまり教育係であった。彼女たちは物語を語り、日記を記すことで、物語の語部という職業集団を形成していったという。今日のナラティブによるセラピーやストーリーテリングによるチームビルディング等のように、平安時代の物語や日記は、人材教育・育成やアイデンティティの形成のために用いられていたのである。

子女育成のための教科書であり、他の物語の模範でもあり、物語論も論じる『源氏物語』はその後どうなったであろうか。『源氏物語』の人生そのものにも物語がある。兵藤（2002）によると、『源氏物語』は12世紀半ばには「歌人必読の書とされ、王

朝の盛時をつたえる典礼の書とみなされ」（p. 4）ていた。子女向け教科書から王朝の古式典礼の正典になるのである。しかし、書籍の方は正典化されていく一方で、著者の紫式部の方は社会の良俗を乱した罪で地獄へ墮ちたという説が広く流布された。兵藤（2002）は、『源氏物語』の正典化と紫式部の墮地獄説により、「その読者共同体から女性が排除され、男性読者による物語テキストの収奪がはかられ」（p. 5）たと論じる。これは、墮地獄説というディスコースにより、物語による実践共同体を破壊した事例の研究でもある。

さらに、兵藤（2002）は物語の流動性と固定化の問題を指摘する。物語は本来語り物として流動的であった。女房たちは物語を語り、書き写し、また別の語り手が語り、どの都度語り換えや書き換えもあったという。その意味で、『源氏物語』も女房たちに開かれていた。「物語テキストは不断に流動的でありえただろう」（p. 30）。しかし定本化（正典化）は物語の語り物としての流動性を固定的な「物語」にさせてしまうのである。これは、ドミナント・ナラティブ（ディスコース）の生成を含意する。

この物語の固定化でさらに政治利用されたのが平家物語である（兵藤、2002）。平家物語は物語というよりは語り物であった。もともと「平家物語という〈書かれた〉テキストがあったのではない」（p. 21）。平家物語は琵琶法師によって語り継がれてきた口承文芸としての語り物であった。女房たちの物語よりもさらに流動的であったのである。しかし、室町時代以降、平家物語を正史とみなそうとする動きがあり、覚一本が定本とされ、時の将軍・足利義満に献上された。こうして、「平家物語は平家一門の鎮魂の物語であると同時に、源氏將軍家の草創・起源を伝承・正当化する物語」（増田、2013：p. 73）になるのである。このドミナント・ナラティブは江戸時代まで日本中を支配していたということになる。

高木（2001）は「平家物語」に代表される語り物が持つ共通語性を議論する。語り物には「日本一の武将」など「日本一」という表現があるが、これは近代の国民国家の概念を受容する以前から「日本」という「神国」に対する意識があったことを示唆する。語り物としての「平家物語」は琵琶法師を媒介として「共通語」を日本全国に普及させた。その共

通語とは当時の都言葉であるが、覚一本はその絶対化に貢献した。「平家物語」に代表される「語り物は『日本』という想像上の共同体を捏造し、語り物の享受者を『教育』する機能を果たしたのである(増田, 2013: p. 74)。

高木(2001)は語り物享受者による「国民」の意識の生成を次のように論じる。語り物享受者は語り物を媒介して共通語を共有する。同時に、日本全国にこの物語内容と共通語を共有する多くの仲間が存在することを意識する。顔を合わせたこともない者同士が同一の価値観を共有しているという意識から、「国民」となる。ここには、物語内容の「教育」効果だけでなく、Foucault(1975)の権力関係論における「規律・訓練」の作用が認められる。語り物享受者は語り物のテキストにより主体(臣民)化され、「神国日本」というシステムに取り込まれるのである。

また、高木(2001)は「語り」の流動性について次のような論考を展開する。琵琶法師の語りの詞章は確かに語りのたびに異なるが、Genette(1972)の概念を援用すると、「そこには物語言説の差異はあるものの、その差異を無効にするように同一の物語内容が君臨している」(高木, 2001: p. 17)といえる。ここで重要なのは、物語言説の揺らぎや変動ではなく、享受者の受容の仕方である。

さらに高木(2001)によると、語り物における流動性とテキストの関係は「声」と「文字」という二項対立で説明できる。語り物など口承文芸は、「文字」として残さないのちに混乱を引き起こす。その意味では「声」の方が「文字」よりもが優位ということになる。しかしDerrida(1967a, 1967b)の「代補」という概念を用いると、議論は転回する。「『代補』とは、あるものが存在するために必要ではないが、それがなくてはあるものが存在できない欠如の補充を行うものである」(増田, 2013: p. 74)。「つまり、『語られる平家物語』にとって、『書かれた平家物語』は必要ではない余剰なるものだが、しかし、『書かれた平家物語』なしでは、〈平家物語〉は存在しないのである」(高木, 2001: p. 99)。ここでは「声」と「文字」の優劣の逆転が含意されているのではない。「語られ、書かれた平家物語」の全体がエクリチュールであるという主張である。

平安時代の女房たちのあいだで物語と同様に、広

く行われていたものが日記である。日記も物語の作者である女房たちのアイデンティティの形成に寄与していたといわれる。本稿では、自伝文学とも呼ばれる日記についても少し触れておこう。

日本では、物語文学だけでなく自伝文学においてもヨーロッパよりも早く10世紀から12世紀にかけて熟成した。ヨーロッパでの自伝テキストの嚆矢はアウグスティヌスの『告白』であろう。しかし、本格的に展開するのは、18世紀の啓蒙主義時代にルソーが『告白』を記してからである。日本で物語同様に日記が盛んに記されたことについて、深沢(2002)は「自己言及テキストとしての『日記文学』の可能性を、言説の公共性という観点から新たに捉えなお」(p. 34)している。

ヨーロッパでは、自伝テキストは権威あるラテン語で書かれたのに対して、日本では「対社会的には、まったく無価値なテキストとして捨て置かれていた」(深沢, 2002: p. 10) 俗語である仮名文字で書かれた。深沢(2002)は、その俗語(仮名文字)で書かれたことで、却って日本文化のアイデンティティを根拠づけるテキストとして評価されるようになったと論じる。

深沢(2002)によると、日記文学のテキストは単独で存立しない。例えば、『紫式部日記』は清少納言の『枕草子』に対抗して記され、そこに描かれた自画像は対照的であった。さらに、その自画像は『更級日記』の作者に模倣される。そのように互いが互いを照らし合う関係にあったのである。そして、深沢(2002)は『紫式部日記』をKant(1784)の「啓蒙主義の『公』は個によって担われるという思想」を先取りするテキストとして議論する。

『紫式部日記』からは、ライバルを蔑む言動や清少納言に対する容赦ない悪口雑言など、弱い者いじめの残忍さを持ち、主家におもねる「召使根性」丸出しの同僚の女房たちと変わらない当時の後宮社会で暮らす生身の女性の姿が読み取れる(深沢, 2002: p. 110)。その姿は、辛うじて公共性を持ちえた近代人には理解不可能な「他者」として現れる。しかし、紫式部は最低限の振る舞いを読者に求めていたという。

現代社会に生きる我々に「他者」として現れる女房たちの行動様式の起因を、深沢(2002)は、女房たちの初出仕におけるトラウマとなる体験であると

論じる。今日でいえば、11, 12歳のまだ13歳位の娘たちは殆ど予備知識も持たずに、後宮社会の女性集団のなかへ送り込まれる。そこで第一義とされているのは、天皇との性愛行為により皇子をもうけることである。そこは嫉妬と羨望と相互不信が渦巻く世界である。その体験は一生涯心の奥底に刻まれるトラウマとなったであろう。女房による日記文学のテキストはその初出仕のトラウマ体験を原点とし、それを克服し、「新しい環境に自己を主体的に順応させていった女房たちの苦闘の記録」(深沢, 2002: p. 124)なのである。

紫式部には、こうした後宮社会で他の女房たちと同様に大人気ない姿も窺えるが、一方でそうした女房たちとは距離を置き、「個と個が素直に向き合える公共的な出会いの場を求めてやまない」(深沢, 2002: p. 116) 側面を持っていたという。それを深沢(2002)は、日記における発言内容よりも消息文というスタイルに見出した。消息文は「特定の相手に対する『呼びかけ』」(p. 126)であり、言遂行的行為である。消息文としての「呼びかけ」は「時空を超えた未知の読者との出会いが期待されている。そのテキストの『呼びかけ』に応じて、党派的对立のうずまく後宮社会の狭く閉ざされた現実を抜け出して、公共の場が開かれてくる」(p. 126)のである。

深沢(2002)は、その「呼びかけ」に応えた例として『更級日記』を挙げる。閉塞した後宮社会でテキストの向こう側に幻想の読者たちを想定し、疎外された者同士が互いに「呼びかけ」合っていたと論じる。日記文学のテキストは、互いに孤立した存在ではなかった。「互いの体験を情報として受け渡し合いながら、テキスト相互の響き合いのなかで、絶えずコミュニケーションをはかっていく、公共の場へと開かれた言説空間として、互いに向き合う関係にあった。そうした幻想の公共空間を共に生きることで、社会階層としての女房という自覚が芽生え、それらのテキストを基盤として倫理観の共有もおこってこよう」(p. 127-128)。

Kant(1784)のいう「公」の可能性を日記文学の特質に見出した深沢(2002)は、Kant(1784)の主張を次のようにまとめる。国家の命令に従う職務は私的活動に過ぎず、公的な活動とは、個人が自由に理性を用いて行う行為である。公衆や自由な読者に向ける個人の発言は理性により行われなければ

ならない。それによってはじめて公的な場が開かれる。「個人の理性的な発言にこそ『公』は宿る」(深沢, 2002: p. 117-118)のである。

深沢(2002)の研究も、紫式部(1965)や折口(1996)、兵頭(2002)、高木(2001)のそれと同様に、現代社会における経営情報学と組織ディスコース研究に資する研究といえるであろう。欧米のドミナント・ナラティヴばかりではなく、時には日本の物語論の語りにも耳を傾ける価値があるのではないだろうか。

#### 4. おわりに

以上、組織ディスコース研究部会の活動内容、そして、日本の物語論について、紹介してきた。本研究部会では、不定期で研究会(研究発表会)を開催しているので、関心をお持ちになった方は、研究会にご参加頂けると幸いです。

#### 参考文献

- [1] Derrida, J., *De la Grammatologie*, Les Editions de Minuit, 1967a. (足立和浩訳『根源の彼方に グラマトロジーについて』現代思潮社(上)(下), 1972年)
- [2] Derrida, J., *La Voix et le Phenomene*, Presses Universitaires de France, 1967b. (林好雄訳『声と現象』筑摩書房, 2005年)
- [3] Foucault, M., *Surveiller et Punir—Naissance de la Prison*, Gallimard, 1975. (田村俣訳『監獄の誕生』新潮社, 1977年)
- [4] Genette, G., *Discours du Recit in Figures III*, Seuil a Paris, 1972. (花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール』水声社, 1985年)
- [5] Kant, I., *Beantwortung der Frage: Was ist Aufklaerung*, Die Berlinische Monatsschrift, Berlin, 1784. (篠田英雄訳『啓蒙とは何か』岩波書店, [1950年] 1974年)
- [6] 折口信夫『折口信夫全集 15 伊勢物語私記・反省の文学源氏物語(後期王朝文学論)』中央公論社, 1996年。
- [7] 高木信『平家物語・想像する語り』森話社, 2001年。
- [8] 兵藤裕己『物語・オーラリティ・共同体』ひつじ書房, 2002年。
- [9] 深沢徹『自己言及テキストの系譜学』森話社, 2002年。

- [10] 増田靖 『生の現場の「語り」と動機の詩学—観測志向型理論に定位した現場研究=動機づけマネジメントの方法論』ひつじ書房, 2013年.
- [11] 紫式部 (山岸徳平 校注) 『源氏物語 (二)』岩波書店, 1965a年.
- [12] 紫式部 (山岸徳平 校注) 『源氏物語 (三)』岩波書店, 1965b年.

**組織ディスコース研究部会連絡先** \_\_\_\_\_

連絡先: 幹事・四本雅人 (長崎県立大学)

E-mail: imi.discourse@gmail.com